

春秋時代の「烝」・「報」・「通」事例から見た

諸侯の婚姻習慣の変化について

平林 美理

はじめに

春秋時代の諸侯の婚姻関係は、その政治や外交と不可分に結びついていた。その一例が、『左伝』に見える「烝」である。「烝」は『左伝』のみに見える婚姻関係で、春秋時代前期の衛・晉・楚において五例の記録がある。筆者は前稿において、それらの多くは「先君と正式な婚姻関係にあった女性をその後継者が娶る」関係で、公位を巡る不安定な情勢下で実施され、正統性の確立などのために必要とされたと指摘した⁽¹⁾。また、「烝」によって生まれた公子は、公位継承に関して、正式な婚姻関係によって生まれた公子とほぼ同等の資格を有していた。これらの点から前稿では、本来「烝」は、夫人や媵などの正式な婚姻に準ずる性質を持った婚姻関係であり、後世の注釈に見える反倫理的な男女関係という理解は、春秋社会の「烝」の実態を正しく反映したものとは言えないと結論した。

しかし、以上のような特徴を持たない事例として、『左伝』成公二年（前五八九）に見える楚の「烝」がある。この事例には、公位の継承などとの関係は窺えない。またこれ以降、「烝」と呼ばれる婚姻関係自体が『左伝』には見られなくなる。

そこで本稿では、「烝」に類似した「通」や「報」などの婚姻関係について、「烝」との比較を通してその政治的背景などの特徴を明らかにした上で、それらの事例が史料に見られなくなる時期に登場する楚の「烝」事例の、春秋史上における位置づけを考察する。

第一節 楚の「烝」について

春秋時代の「烝」事例のうち最も後代の記録となるのが、宣公一二年（前五九七）の邲の戦いの後に起きた、楚の黒要と夏姫に関するものである。夏姫は鄭の穆公の娘で、陳の夏御叔に嫁いたが、夫の死後は陳の靈公や大夫らと密通したとされ、関わった男性を不

幸にする「不祥人」として『左伝』では描写されている。宣公一年（前五九八）に夏姫が嫁ぎ先を滅ぼされ楚に連行されたことに關して、『左伝』成公二年には次のようにある。

楚之討陳夏氏也、莊王欲納夏姫。申公巫臣曰、「不可……」。王乃止。子反欲取之。巫臣曰、「是不祥人也……」。子反乃止、王以子連尹襄老。襄老死於郟、不獲其尸。其子黑要烝焉。

楚の陳の夏氏を討つや、莊王、夏姫を納れんと欲す。申公巫臣曰く、「不可なり……」と。王乃ち止む。子反、之を取らんと欲す。巫臣曰く、「是れ不祥の人なり……」と。子反、乃ち止め、王、以て連尹襄老に予う。襄老、郟に死し、其の尸を獲ず。其の子黑要、焉に烝す。

この楚の「烝」と、衛や晉の「烝」事例には相違点が多い。第一に、衛・晉の事例のうち最も後代に当たる魯僖公一〇年（前六五〇）の晉の恵公の「烝」と、楚の事例の間には約五〇年の開きがあり、年代が大きく離れている。第二に、他の四つの「烝」事例が公室の婚姻關係であつたのに対し、楚の襄老・黑要は父子ともに楚の一臣下である。「烝」された女性についても、他の事例では国君や太子の妻であるのに対して、夏姫は大夫・夏御叔の未亡人であつた。このような楚の「烝」の特殊性は、何に起因しているのだろうか。

楚での夏姫の動向については『国語』や『史記』にも見え、夏姫の処遇を巡って楚王やその臣下達が生うという点は共通している。しかし、『国語』楚語上の場合、

莊王既以夏氏之室賜申公巫臣、則又昇之子反、卒于襄老。襄老死于郟、二子争之、未有成。恭王使巫臣聘于齊、以夏姫行、遂奔晉。

莊王、既に夏氏の室を以て申公巫臣に賜わんとし、則ち又た之を子反に昇えんとし、卒に襄老に于いてす。襄老、郟に死し、二子、之を争い、未だ成有らず。恭王、巫臣をして齊に聘せしむるも、夏姫を以て行き、遂に晉に奔る。

とあり、夏姫が襄老の妻となつた点は『左伝』と同じだが、夏姫と黒要の「烝」關係には言及がない。また『史記』の場合、夏姫が楚に来る原因となつた楚の陳攻撃については卷四〇楚世家莊王一六年に、楚における夏姫を巡る争いについては卷三九晉世家景公一一年条に見えるが、夏姫と黒要の「烝」に關する記述や、莊王や子反らの対立を経て、夏姫が襄老の妻となつたことは見えない。

これに対して、「烝」という表現ではないが、『左伝』以外に唯一、夏姫と黒要の關係に言及している伝世文獻が、前漢の劉向『列女伝』孽嬖伝陳女夏姫篇の以下の記述である。

莊王見夏姫美好、將納之。申公巫臣諫曰、「不可……」。王從之、使壞後垣而出之。將軍子反見美、又欲取之。巫臣諫曰、「是不祥人也……」。子反乃止。莊王以夏姫與連尹襄老。襄老死於郟、亡其尸。其子黑要又通於夏姫。

莊王、夏姫の美好なるを見、將に之を納れんとす。申公巫臣、諫めて曰く、「不可なり……」と。王、之に従い、後垣を壊ち

て之を出さしむ。將軍子反、美なるを見て、又た之を取らんと欲す。巫臣、諫めて曰く、「是れ不祥の人なり……」と。子反、乃ち止む。莊王、夏姫を以て連尹襄老に與う。襄老、郕に死し、其の尸を亡う。其の子黒要も又た夏姫と通ず。

『列女伝』には、『左伝』を題材にして劉向が説話化したと考えられる記事も多く、この篇もその一つだろう。⁽²⁾しかし、内容に『左伝』との関連が窺える一方で、この篇では夏姫と黒要の関係を「其子黒要又通於夏姫」とし、「通」に作っている。衛や晉の「烝」では、他の史料で「烝」を「通」と言い換えている例はなく、該当する婚姻関係自体を記述しないか、通常の婚姻と同様に扱っている。『列女伝』の中でも、この篇以外に「烝」に相当する関係を「通」と表現している例は見られない。⁽³⁾

このような異同の意味を考える上で参考になるのが、近年公表された戦国時代中期頃の竹簡である清華簡「繫年」である。その第一章には次のような記述がある。⁽⁴⁾

陳公子徵舒取妻于鄭穆公、是少盫。莊王立十又五年、陳公子徵舒殺其君靈公。莊王……入陳、殺徵舒、取其室以予申公。連尹襄老與之爭、斂之少盫。連尹止於河灘、其子黒要也又室少盫。莊王卽世、共王卽位。黒要也死、司馬子反與申公爭少盫。陳の公子徵舒、鄭の穆公より妻を取る、是れ少盫なり。莊王立ちて十又五年、陳の公子徵舒、其の君靈公を殺す。莊王……陳に入り、徵舒を殺し、其の室を取り以て申公に予う。連尹襄

老、之と争い、之より少盫を斂う。連尹、河灘に止り、其の子黒要也も又た少盫を室とす。莊王、世に卽き、共王、卽位す。黒要也、死し、司馬子反と申公、少盫を争う。

この史料には、夏姫に相当する女性が「少盫」として見え、夏姫の子である夏徵舒が夏姫の夫とされるなど、伝世文献との異同が多い。しかし、連尹襄老の妻となつた夏姫を襄老の子・黒要（「繫年」では「黒要也」）が妻としたことについては、「黒要也又室少盫」とあり、「烝」という表現でこそないが、『左伝』や『列女伝』と同じくその言及がある。「繫年」第一章が全体を通して伝世文献との事実関係に異同が多いことを踏まえると、「繫年」が書写されたとされる戦国時代中期の時点で、夏姫が黒要の妻となつたことを「黒要也又室少盫」と記述する、『左伝』などとは異なる系統の史料が存在したか、あるいは原史料の時点で「烝」と表記していたものを、何らかの理由で「繫年」編者がこのような形に改めた、という二つの可能性が考えられる。

以上のように、楚の黒要と夏姫の関係を「烝」と表記する例は、『左伝』以外の史料では見られなかったが、「繫年」では「室」、「列女伝」は「通」という語で、「烝」にあたる関係を説明している。他の「烝」事例とは違い、夏姫の「烝」だけが他の史料で「通」や「室」と表記された要因については、「烝」の事例そのものが夏姫の記事を境に見られなくなることとの関係を考える必要があるだろう。そこで、春秋時代における「烝」の位置づけの変遷について検

を「烝」として考えると考えられる。これは父の妻を娶る他の「烝」事例とは一見異なるが、本来の後継者であった太子の妻を、実際の後継者が娶っている点は、晉・衛の「先君の妻を後継者が娶る」関係に近いと言える。

この例のように、兄の死後にその妻と弟が再婚する叔嫂婚は、倫理上の是非はさておき、いくつかの事例がある。そこで以下では、それらについて「烝」との類似点を検討する。

(二) 紀の叔姫を巡る婚姻関係

兄の妻を弟が娶る、文化人類学で言うレビレート婚のような行為は、後代の儒学規範では重大な倫理違反とみなされていた。『礼記』曲礼篇上には、

男女不雜坐、不同櫛櫛、不同巾櫛、不親授。嫂叔不通問。

男女雜坐せず、櫛櫛を同じくせず、巾櫛を同じくせず、親授せず。嫂叔、問を通ぜず。

とあり、両者の接近を禁じている。同じく檀弓篇には、

嫂叔之無服也、蓋推而遠之也。

嫂叔の服無きや、蓋し推して之を遠ざけるなり。

とあり、兄の妻と弟の間に喪服義務がないのは、両者を遠ざけるためであるとしている。

このような儒学規範によって、後代では叔嫂婚は倫理的に問題ある行為と看做されたが、実際の春秋史上には、兄の妻と弟の再婚や

「通」の事例がいくつか見える。その一つが、隱公七年（前七一六）に紀に嫁いだ魯の公女・紀叔姫を巡る婚姻関係である。これについては宇都木章氏によって、この婚姻関係が斉に脅かされていた紀と魯の同盟の中で生じたこと、のちに紀叔姫が紀公の弟に再嫁したことが指摘されている。ただし、宇都木氏はこの婚姻と「烝」との関係については言及していない⁽⁶⁾。

春秋時代初期、紀と魯の間には通婚関係があり、頻繁に盟を結ぶなど政治的にも緊密な関係にあった。魯は隱公二年（前七二二）に紀に公女伯姫を嫁し、その直後に盟を結んでいる。さらに隱公七年には、伯姫の媵として、妹の叔姫（紀叔姫）をも嫁している。

ところが、伯姫・叔姫の夫である当時の紀侯は、弟が鄆邑をもって斉に降った結果、莊公四年（前六九〇）に紀から去ることになる。伯姫はこの年に死去したが、叔姫については以降も『春秋』経文中にその名が登場する。『春秋』莊公十二年（前六八二）には「紀叔姫歸于鄆」とあり、これについて『左伝』には伝文がないが、『公羊伝』莊公十二年は、

十有二年春、王三月、紀叔姫歸于鄆。其言「歸于鄆」何。隱之也。何隱爾。其國亡矣。徒歸于叔爾也。

十有二年春、王三月、紀の叔姫、鄆に歸す。其れ「鄆に歸す」と言うは何ぞや。之を隱すなり。何ぞ隱すや。其れ國、亡べばなり。徒らに叔に歸すのみなり。

とし、紀叔姫の鄆への「歸」を、彼女の夫であった紀侯の弟・紀季

「通」じるといふ行為は、先君夫人の直接的な政治的後盾を得る意味と同時に、江頭氏の指摘したような理由によって、その関係自体に、後継者としての正統性と関わる意味があったと解される。

また、公子慶父が哀姜を通して助力を得ようとした齊は、当初は閔公の即位に積極的で、僖公が即位して慶父が死ぬと、哀姜は実家である齊によって殺されている。これについて吉田章人氏は、哀姜は公子慶父の擁立という、実家の思惑から外れた独自の意思を示した結果、齊によって排除されたと指摘している⁽⁸⁾。

一方で齊は、桓公一三年（前六九九）の衛の恵公の即位の際には、恵公が幼いことを理由に、恵公の兄・昭伯と齊出身の宣姜の「烝」を積極的に主導している⁽⁹⁾。オジと異母兄という違いはあるが、齊の血を引く幼君の後見人と、先君の妻の間の関係という点で、昭伯の「烝」と慶父の「通」は、実はよく似ている。このような類似した状況における齊の対応の違いは、「烝」のような関係の在り方が、春秋社会においては、単なる婚姻習慣にとどまらず、政治的な要素を多分に含んだものであったことを示すものと言えよう。

なお、莊公の後継者争いには、叔嫂間の関係とみられるものも有一例ある。『左伝』閔公二年には、

成季之將生也、桓公使卜楚丘之父卜之、曰、「男也。其名曰友。在公之右、間于兩社、爲公室輔。季氏亡則魯不昌」。又筮之、遇大有之乾。曰、「同復于父、敬如君所」。及生、有文在其手。曰「友」。遂以命之。……成風聞成季之繇、乃事之而屬僖公焉。

故成季立之。

成季の將に生まれんとするや、桓公、卜楚丘の父をして之を卜せしむ。曰く、「男なり。其の名を友と曰う。公の右に在り、兩社に間まり、公室の輔と爲らん。季氏、亡びば則ち魯は昌えざらん」と。又た之を筮し、大有の乾に之くに遇う。曰く、「同じく父に復る。敬せらるること君所の如くならん」と。生まるるに及び、文の其の手に在る有り。曰く、「友」と。遂に以て之に命ず。……成風、成季の繇を聞き、乃ち之に事えて僖公を屬す。故に成季、之を立つ。

とあり、哀姜と慶父の共謀が失敗した後の、閔公の異母兄・僖公の即位には、その母・成風による莊公の弟・公子友（成季）への「事」が大きな役割を果たしていた。成風の実家は須句という小国で、莊公の長子である子般や、齊と血縁のある閔公、莊公の弟・公子牙と公子慶父の一派などに比べると、僖公は有力な後盾に欠けていた。そのような中で成風は、国君の輔佐となると予言された公子友に「事」え、我が子の後見を依頼した。

正夫人以外の妻が公室の有力者などに「事」えて我が子を「屬」するという行動は、『左伝』文公一八年（前六〇九）に魯の文公の二妃・敬嬴が東門襄仲に「事」えて我が子を「屬」した例など、後継者争いの中でいくつか例がある。敬嬴の場合はその結果、後継者争いに東門襄仲が大きな役割を果たし、敬嬴が生んだ宣公の即位に成功している。

成風の依頼を受けた公子牙の場合、当初は子般を即位させようとしたが、後に閔公が殺されると、成風に「屬」された僖公を擁立している。「事」が、「烝」や「通」のような男女関係であったかは不明だが、公子の後見役と先君の妻の間で結ばれる政治的要素を持った関係という点では、哀姜と公子慶父の「通」関係や、衛の宣姜と昭伯の「烝」関係などと似た側面を有している。

(四) 周王の後の「通」

もう一例の『左伝』の叔嫂間の「通」事例は、『左伝』僖公二四年に、

初、甘昭公有寵於惠后。惠后将立之、未及而卒。昭公奔齊、王復之。又通於隗氏。王替隗氏。頤叔・桃子曰、「我實使狄。狄其怨我」。遂奉大叔、以狄師攻王。王御士將禦之。王曰、「先后其謂我何。寧使諸侯圖之」。王遂出、及坎飲。國人納之。

初め、甘の昭公、惠后に寵有り。惠后、將に之を立てんとするも、未だ及ばずして卒す。昭公、齊に奔るも、王、之を復す。又た隗氏に通ず。王、隗氏を替う。頤叔・桃子曰く、「我、實に狄を使う。狄其れ我を怨まん」と。遂に大叔を奉じ、狄の師を以て王を攻む。王の御士、將に之を禦がんとす。王曰く、「先后、其れ我を何と謂わん。寧ろ諸侯をして之を圖らしめん」と。王、遂に出で、坎飲に及ぶ。國人、之を納る。

とあり、周の襄王の弟である甘の昭公（王子帶・大叔）が、襄王の

后であった隗氏に「通」じたもので、これをきっかけに昭公と襄王の間で内紛が発生し、襄王は鄭に亡命した。

昭公は母・惠后から寵愛され、兄である襄王と王位を争う立場にあった。しかし、僖公十一年（前六四九）に「揚拒泉臺伊雒之戎」に洛邑を攻撃させるといふ事件を起こし、これを受けた襄王に討伐されて齊へ出奔している。僖公二十二年（前六三八）、昭公は周に呼び戻されたが、後ろ盾であった母はすでに亡くなっており、昭公が隗氏と「通」じたのはその二年後のことだった。隗氏は「通」事件の起きた僖公二十四年に襄王に嫁いだ狄出身の女性で、昭公と「通」じた後は、狄の軍が昭公を支援するなど、重要な後援者となった。このような背景を踏まえると、昭公が隗氏に「通」じたのは、王室内の新しい庇護者が必要としたためであったのだろう。

「通」という関係は、事例自体は『左伝』に数多く見えるものの、当事者の関係性が非常に多様なため一括りにして述べる事が難しい。ただ、「烝」のように夫の死後の再婚であっても、慶父と哀姜の関係のように「通」とされる例が存在していることから、少なくとも哀姜などの時代までは、「烝」と「通」の間には一定の区別が存在し、「烝」は「通」とは一線を画す関係を指すものであったと考えられる。

(五) 衛の大叔遺と孔姑

これまで見てきた事例とは年代が大きく離れているが、哀公一

年（前四八四）の衛の大叔遺と孔姑の関係も、兄の夫人が弟に再嫁した事例である。『左伝』哀公一二年には、

冬、衛大叔疾出奔宋。初疾娶于宋子朝、其娣嬖。子朝出、孔文子使疾出其妻而妻之。疾使侍人誘其初妻之娣、實於犁而爲之一宮、如二妻。文子怒、欲攻之。仲尼止之。遂奪其妻。或淫于外州、外州人奪之軒以獻。恥是二者、故出。衛人立遺、使室孔姑。冬、衛的大叔疾、宋に出奔す。初め疾、宋の子朝に娶り、其の娣、嬖せらる。子朝出づるや、孔文子、疾をして其の妻を出さしめて之に妻わす。疾、侍人をして其の初めの妻の娣を誘い、犁に實きて之に一宮を爲り、二妻の如くす。文子怒り、之を攻めんと欲す。仲尼、之を止む。遂に其の妻を奪う。外州に淫すること或り。外州の人、之が軒を奪い以て獻ず。是の二者を恥じ、故に出ず。衛人、遺を立て、孔姑を室とせしむ。

とあり、兄・大叔疾が宋に亡命したため、その夫人・孔姑を疾の弟・大叔遺が妻とした。その背景には、大叔疾が、前妻である宋の子朝の娘の一人との関係が続けていたことが、孔姑の父・孔文子の怒りを買ったという事情があった。これに対して孔文子は、孔姑を大叔疾と離縁させ、大叔疾が出奔すると、その弟と再婚させた。⁽¹⁰⁾

この事件は春秋時代最末期のもので、すでに「烝」という関係が史料上に登場しなくなる時期にあたる。このような例が、春秋初期に「烝」事例が記録されている衛において見られることから、「烝」のような婚姻関係の在り方が、地域性のある行為であった可能性に

についても考慮する必要があるだろう。

第三節 鄭の文公の「報」関係

前節で挙げた叔嫂婚以外に「烝」に類似した婚姻と言えるのが、後世の注釈者たちによって「烝」と並列される「報」の関係である。『左伝』宣公三年（前六〇六）には、

文公報鄭子之妃、曰陳嬀。生子華・子臧。子臧得罪而出。誘子華而殺之南里、使盜殺子臧於陳・宋之間。

文公、鄭子の妃を報ず、陳嬀と曰う。子華・子臧を生む。子臧、罪を得て出づ。子華を誘いて之を南里に殺し、盜をして子臧を陳・宋の間に殺さしむ。

とあり、鄭の文公は自身のオジ・鄭子の妃を「報」じ、子華・子臧が生まれた。「報」という語について杜預は、

鄭子文公叔父子儀也。漢律淫季父之妻曰報。

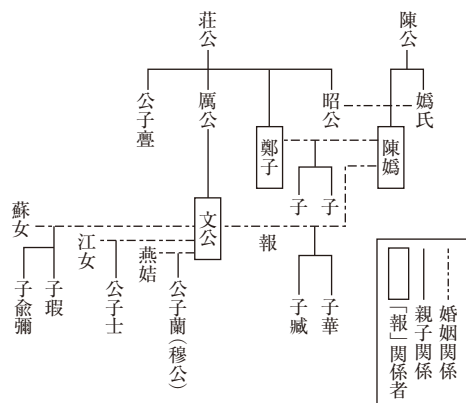
鄭子、文公の叔父の子儀なり。漢律、季父の妻に淫するを報と曰う。

と注し、漢律では、オジの妻との密通行為と定義されていたことが分かる。また、『詩』国風・雄雉の孔穎達疏が引く『左伝』の服虔注は、

報、復也。淫親屬之妻曰報。

報、復なり。親屬の妻に淫するを報と曰う。

とし、後代の注釈者たちは、「報」を倫理上好ましくない行為と解



【図3】 鄭の「報」関係

している。また、服虔や孔穎達は、「烝」と「報」を並べて説明しており、両者を関連するものと考えていた。

しかし先述のように、「烝」は春秋時代において、正式な婚姻関係に極めて近いものであった。そ

のため「報」についても、「淫」という説明だけではその実態を十分に理解することはできないと思われる。そこで以下、「烝」や叔嫂婚の例も参考にし、鄭の「報」の背景や当時の社会における位置づけを検討する。

陳嬀の最初の夫・鄭子は文公のオジだが、文公の父・厲公とは対立関係にあった。正確な時期は不明だが、鄭子が殺されたのが荘公一四年（前六八〇）であるため、文公が陳嬀を「報」じたのは、この年以降と推測される。また、『春秋』僖公七年（前六五三）には、秋七月、公會齊侯・宋公・陳世子款・鄭世子華、盟于甯母。秋七月、公、齊侯・宋公・陳の世子款・鄭の世子華に會し、甯母に盟す。

とあり、陳嬀の産んだ子華が会盟に参加している。この会盟は鄭を攻めるためのもので、子華は諸侯たちの説得のために送り込まれた。このことから、子華は僖公七年時点ですのような会盟に参加可能な年齢で、少なくともその一〇年以上前には生まれていたと考えられる。よって、文公が陳嬀を「報」じたのは、鄭子が殺された荘公一四年以降、文公が即位する荘公二十一年（前六七三）或いはそこから数年後のどこかの時点と考えられる。それでは、文公はなぜこの時期に叔父の妃を「報」じる必要があったのだろうか。

ここで、文公以前の鄭の政治状況に目を向けると、文公以前の国君の地位は非常に不安定な状態にあり、昭公、厲公、公子臺、鄭子ら荘公の子が立て続けに国君に立つ事態が続いていた。荘公の死後の鄭の公位の変遷をまとめると、【表一】の通りである。⁽¹⁾このような頻繁な代替わりの中、桓公一八年（前六九四）に

【表1】 鄭の公位の変遷

即位した人物	在位期間	即位時の支援者
昭伯（忽）①	桓公11年 (実際は即位できず)	祭仲
厲公（突）①	桓公11～15年	宋の雍氏（母方の一族）
昭伯②	桓公15～17年	祭仲
公子臺	桓公17～18年	高渠彌
鄭子（子儀）	桓公18年～荘公14年	祭仲
厲公②	荘公14年～荘公21年	傅瑕
文公	荘公21年～僖公32年	

子亹が齊の会盟の場で殺されたため、鄭子が陳から迎えられて即位した。その擁立には、莊公時代からの有力政治家であった祭仲が関与していた。

一方、厲公は祭仲と対立しており、最初の在位中に祭仲に対する陰謀が露見し出奔したが、のちに大夫傅瑕の手引きで鄭に帰国して再び即位した。当時の鄭子と厲公に対する大夫らの認識については、『左伝』莊公一四年に厲公と大夫原繁の次のような対話が見える。

使謂原繁曰、「……上大夫之事、吾願與伯父圖之。且寡人出、伯父無裨言、入、又不念寡人。寡人憾焉。」對曰、「先君桓公命我先人、典司宗祏。社稷有主、而外其心、其何貳如之。苟主社稷、國內之民、其誰不爲臣。臣無二心、天之制也。子儀在位十四年矣。而謀召君者、庸非二乎。莊公之子猶有八人。若皆以官爵行賂、勸貳而可以濟事、君其若之何……」。

原繁に謂わしめて曰く、「……上大夫の事、吾れ願わくは伯父と與に之を圖らん。且に寡人出でしとき、伯父、裨言無く、入るや、又た寡人を念わず。寡人、焉を憾む」と。對えて曰く、「先君桓公、我が先人に命じ、宗祏を典司せしむ。社稷に主有りて、其の心を外にせば、其れ何の貳か之に如かん。苟も社稷を主れば、國內の民、其れ誰か臣爲らざらん。臣、二心無きは、天の制なり。子儀、位に在ること十四年なり。而るに君を召くを謀るは、庸ぞ二に非ざらんや。莊公の子、猶お八人有

り。若し皆な官爵を以て賂を行い、貳を勸めて以て事を濟す可くんば、君、其れ之を若何せん……」と。

このやりとりから、臣下たちは鄭子を正統な国君として認めていたこと、この時点で厲公以外にも莊公の公子がまだ残っていたことが分かる。厲公にとって、臣下たちのこのような認識や他の兄弟の存在は、自分の地位を脅かすものと言える。この時、鄭子とその子供は殺されており、さらに、既に祭仲は故人であったが、莊公一六年（前六七八）には「雍糾の亂」などで祭仲側についた者たちの排除が行われている⁽¹²⁾。

厲公の後を継いで文公が即位したのは、厲公の鄭帰国から六年後の莊公二一年だが、厲公による敵対勢力の肅清からあまり年月が経っておらず、この時期、鄭における文公の地位は盤石とはいい難かったと考えられる。そのような政治的に困難な状況下で文公と陳嬀の「報」は行われており、これは多くの「烝」事例とも共通する。衛や晉の「烝」が、正統性や後ろ盾に乏しい国君の即位と関連して行われていたのと同様、文公も、文公自身の父とは対立関係にあった鄭子の妃を「報」じること、鄭子を支持していた勢力に、自分への支持を期待したのではないだろうか。

さらに、文公が陳嬀を「報」じるとは、対外的にも少なからず意味があったと考えられる。陳嬀の出身国・陳と鄭の婚姻関係は、『左伝』から分かる範囲では、昭公忽の時に始まっている。『左伝』隱公七年に、

鄭公子忽在王所。故陳侯請妻之。鄭伯許之。乃成昏。

鄭の公子忽、王所に在り。故に陳侯、之に妻わさんと請う。鄭伯、之を許す。乃ち昏を成す。

とあるように、昭公は、周の人質となっていた太子時代に陳の桓公の娘を娶っている。昭公と同じく祭仲に支持されていた鄭子も陳の女性を妃とし、即位以前には陳に身を寄せている。しかし、陳側からすれば、陳侯自ら婚姻を求めた昭伯も、同じく公女を嫁がせた鄭子も、厲公との対立の結果殺されている。このような陳と厲公の関係を踏まえると、昭公や鄭子と対立した厲公の子である文公が陳嬀を「報」じることには、対陳政策としての側面も窺われる。

文公の「報」については他にも論すべきことが多いが、少なくともこの時の鄭において文公と陳嬀の「報」が必要とされた背景は「烝」の場合によく似ており、この事例については、「烝」同様、ある程度正式な婚姻関係に類するものであったと言えるだろう。

第四節 春秋時代における「烝」・「報」の位置づけ

ここまで見てきた「烝」や「報」、およびそれらに類似した婚姻関係について改めて時代順に整理すると、【表二】のようになる。すでに述べたように、「烝」はいずれも春秋時代前期の事例で、宣公一二年の楚の事例以降は史料に見えない。さらに、「烝」に類似した叔嫂婚や「通」関係も含めると、「烝」やそれに類似した関

【表 2】 春秋時代の「烝」・「報」および類似した婚姻関係

年代（西暦）	出典	当事者	出身国		夫側から見た妻の立場	婚姻関係
			夫	妻		
前735～前719年	『左伝』 桓公16年 (前696)	衛の宣公と夷姜	衛	夷？	父・莊公の妾 (又は媵？)	烝
前699年頃	『左伝』 閔公 2 年 (前660)	衛の昭伯と宣姜	衛	齊	兄の妻として嫁したが、 父・宣公が「取」った妻	烝
前680～前673頃	『左伝』 宣公 3 年 (前606)	鄭の文公と陳嬀	衛	陳	オジ・鄭子の妃	報
前682年	『公羊伝』 莊公12 年（前682）	紀侯の弟と叔姬	紀	魯	兄の夫人の媵	婦
前676年以前？	『左伝』 莊公28年 (前666)	晉の献公と齊姜	晉	齊	父・武公の妾	烝
～前660年	『左伝』 閔公 2 年 (前660)	魯の公子友と成風	魯	須句	兄・莊公の妾	事
～前660年頃	『左伝』 閔公 2 年 (前660)	魯の公子慶父と哀姜	魯	齊	兄・莊公の夫人	通
前640年	『左伝』 僖公15年 (前645)	晉の恵公と賈君	晉	賈	異母兄・太子申生の夫人	烝
前636年	『左伝』 僖公24年 (前636)	周の王子帯と隗氏	周	狄	兄・襄王の後	通
前597年	『左伝』 成公 2 年 (前589)	楚の黒要と夏姬	楚	鄭	父・襄老が楚王から与え られた妻	烝
前484年	『左伝』 哀公11年 (前484)	衛の大叔遺と孔姑	衛	衛	兄・大叔疾の妻	室

係は、宣公二年の楚の「烝」と哀公十一年の衛の事例を除いて、基本的に魯の僖公年間（前六五九～六二七）を境に見られなくなる。

このような傾向が生じる背景については今後の検討課題だが、この時期の婚姻観に関して、文公六年（前六二二）に晉の襄公が亡くなった際の後継者選定の議論の中に、興味深い論争がある。當時、襄公の嫡子（靈公）はまだ幼く、大夫たちは襄公の兄弟から次の国君を選ぼうとし、趙盾（趙孟）が推薦する公子雍と、賈季（狐射姑）が推す公子楽が候補に挙がった。この時の議論について『左伝』文公六年には、

八月乙亥、晉襄公卒。靈公少、晉人以難故欲立長君。……賈季曰、「不如立公子樂。辰嬴嬖於二君。立其子、民必安之」。趙孟曰、「辰嬴賤、班在九人。其子何震之有。且爲二嬖、淫也。爲先君子、不能求大、而出在小國、辟也。母淫子辟、無威。陳小而遠、無援。將何安焉……」。

八月乙亥、晉の襄公、卒す。靈公少く、晉人、難の故を以て長君を立てんと欲す。……賈季曰く、「公子樂を立つるに如かず。辰嬴、二君に嬖せらる。其の子を立つれば、民、必ず之を安んず」と。趙孟曰く、「辰嬴、賤にして、班は九人在り。其の子、何の震か之れ有らん。且つ二嬖と爲るは、淫なり。先君の子爲るも、大を求むる能わずして、出でて小國に在るは、辟なり。母の淫にして子の辟なれば、威無し。陳は小にして遠く、援無し。將に何ぞ安ぜん……」と。

とあり、公子楽の母・辰嬴が文公とその甥・懷公の二君に寵愛されたことが問題となった。辰嬴は秦の公女で、次のような経緯で文公に嫁した。秦の穆公は、僖公十七年（前六四三）に人質として秦に來た太子時代の懷公に、自分の娘・懷嬴を娶らせた。ところが、僖公二十二年（前六三八）に懷公が秦を脱出すると、後に文公が秦に入つた際に、懷嬴を含む五人の公女を彼に侍らせた。⁽¹³⁾ 懷嬴と辰嬴が同一人物であるかについては議論もあるが、少なくともこの時文公に嫁いだ女性の一人が辰嬴で、文公六年の記述から、おそらく懷嬴の賤としてその姉妹も懷公の妻となっていた。特殊な状況ではあるが、これも先君の妻とその後継者が再婚した事例と言える。

文公六年の議論において、辰嬴の地位に対する賈季と趙盾の見方は全く対照的である。賈季が「嬖於二君」を国の安定のために有益な事柄として肯定的に捉えているのに対し、趙盾は、これを「淫」として否定し、そこには女性の再婚や「烝」「報」のような関係とは相容れない倫理観が窺える。

ただ、春秋時代前半の時点では、妻の親族が主導する再婚が珍しくないなど、再婚自体は必ずしも問題視されておらず、趙盾の考え方は本来普遍的なものではなかった可能性が高い。趙盾と賈季の論争からは、この時期は婚姻に関わる倫理観が変化する過渡期と見られ、僖公年間以降に「烝」や叔嫂婚など「嬖於二君」に該当するであろう関係が見られなくなることの背景の一つとして、このような倫理観の変化があったのだろう。

むすびに

本稿では、春秋時代の「烝」に類似した叔嫂婚や「通」・「報」の事例と「烝」との比較を通して、そのような婚姻関係の春秋時代における位置づけについて検討した。「烝」は、基本的には父の妻が娶る、あるいは兄の妻を弟が娶るものであり、要するに先君の妻を後継者が娶る婚姻関係であった。これと類似した関係として、叔嫂婚や「通」の事例があり、これらの中には、その政治的役割が「烝」と類似した例も見られた。『左伝』宣公三年の鄭の文公の「報」も、国君の地位が不安定な時期に対立勢力との融和を実現し、文公の地位を安定するために必要とされた婚姻関係と考えられ、やはり「烝」とよく似た関係であった。

「烝」や「報」、叔嫂婚や「通」の事例は春秋時代前半に集中しており、僖公年間を最後にほとんど記録に見えなくなる。また、その後の文公六年には、かつて二例の「烝」関係が認められた晉において、「璧於二君」が批判されるという事態が生じている。

本稿で最初に取り上げた楚の夏姫の「烝」関係が発生したのは、「烝」や叔嫂婚が一般的でなくなっていく時期のことであった。恐らく「烝」の政治的役割は当時徐々に薄れつつあり、その事が、他の事例とは背景の大きく異なる楚の夏姫の婚姻関係も「烝」とみなされた要因の一つだったのであろう。そして、楚の「烝」が、清華

簡「繫年」ですでに「烝」と表記されていないことは、夏姫に関する説話が形成される春秋時代から戦国中期の比較的早い段階で、「烝」という語の意味自体も失われつつあった可能性を示唆するものとも考えられる。

注

- (1) 拙稿「春秋時代における「烝」婚の性質」(『史観』一七二、二〇一五年) 参照。
- (2) 『列女伝』各篇の典拠については下見隆雄『劉向「列女伝」の研究』(東海大学出版会、一九八九年) 八八六―八九九頁参照。陳女夏姫篇については、同書八四〇―八四八頁参照。
- (3) 一例として、『左伝』桓公一六年に見える衛の宣公に「烝」された夷姜について、『史記』衛世家は「宣公愛夫人夷姜」、『列女伝』宣公姜篇は「宣公夫人夷姜」としており、いずれも夷姜を「夫人」と称し、「烝」という関係については言及していない。
- (4) 清華大学出土文献与保護中心編・李学勤主編『清華大学藏戰國竹簡』第二輯(中西書局、二〇一一年) 七六―一八一、一七〇―一七三頁参照。
- (5) 宣姜が衛に嫁ぐ際の経緯は『左伝』桓公一六年に見え、昭伯の父・宣公は、太子急子の夫人として斉から宣姜を迎えたが、いざ衛にやって来た宣姜を見て自分の妻とした。
- (6) 宇都木章『「春秋」にみえる魯の公女』(『中国古代史研究』六、研文出版、一九八九年) 参照。
- (7) 江頭廣『姓考―周代の家族制度―』(風間書房、一九七〇年) 一三八、三〇三頁参照。
- (8) 吉田章人「魯・斉関係における婚姻と夫人」(『史学』七八―三、二〇〇九年) 参照。
- (9) この「烝」関係については、『左伝』閔公二年に見える。その詳細は拙

稿二〇一五参照。

(10) 妻の実家が離縁を主導すること自体は、齊の桓公夫人・蔡姬を蔡が再婚させた例など、春秋時代を通して少なからず見られる。孔姑の場合も、「孔文子使疾出其妻而妻之」や「文子怒、欲攻之。仲尼止之。遂奪其妻」などの記述から、婚姻時と離縁時のいずれにおいても、妻の実家が主導的な立場であったことが分かる。

(11) 表中の①・②は、複数回即位した人物の一度目・二度目の在位期間を示す。

(12) 「雍糾之亂」とは、厲公が祭仲を排除しようとした桓公一五年（前六九七）の事件である。祭仲の排除に失敗した厲公は出奔し、昭公が即位することとなった。

(13) 『左伝』僖公二十三年に「秦伯納女五人、懷嬴與焉。奉匭沃盥、既而揮之、怒曰、「秦・晉匹也、何以卑我」。公子懼、降服而囚」とある。これについては『国語』晉語四にも記事が見えるが、この事件の後、改めて正式に納幣して懷嬴を娶ったとしている。